



「震災のときは米と水に助けられた。自然に生かされているんだなって感じたんです」と阿部さんは話す

南三陸なうな人

【阿部博之さん】 自然に生かされた米が 地域に輝きをもたらす

山あいに広がる豊かな里山を黄色に染め上げる稲。思わず見とれてしまうその光景に、入谷地区で農業を営む阿部博之さんはホッと胸をなで下ろしていた。阿部さんが安堵の表情を見せるのは、記録的な雨模様が続いた今年の天候のせいだけではない。ちょうど一年前の稲刈り中、阿部さんは田んぼで倒れた。脳出血だった。

「あのときは一年後またこの光景を見られるとは思っていませんでした」

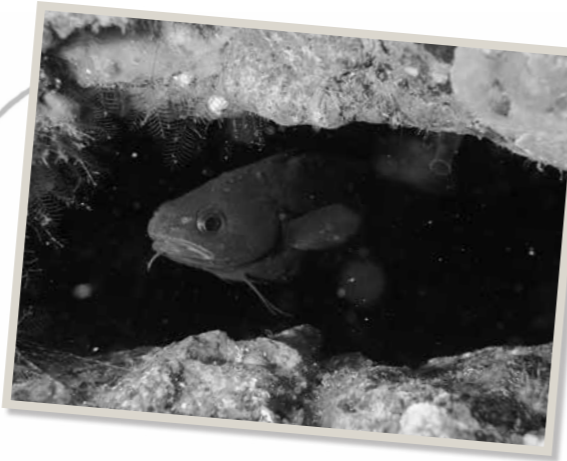
懸命のリハビリの末、春の田植えに間に合わせた。しかも、さらなる挑戦を胸に田んぼへと戻ってきた。それは、これまで行ってきた無農薬での栽培に加え、無肥料での米栽培への挑戦だ。

「震災後、町が進める持続可能な町づくりに向けて、できる限り自然に寄り添うかたちで農業を行いたいと思っていました。そしてそれが米の価値を高めることにつながる、と」

カエルや、クモがいて、トンボが舞う阿部さんの田んぼ。自然の恵みに生かされ、しっかりと根を張り、天候不順にも負けず黄金色に輝く稲穂。さまざまな想いが凝縮した稲穂が、いよいよ収穫のときを迎えている。

南三陸なう 検索 阿部さんをもっと詳しく知りたい人は、南三陸公式ブログ 南三陸なうをご覧ください。

ネイチャーセンター準備室だより 「どんこの季節」



海底で潜水調査をしていると、岩の割れ目からそっと顔を出している魚と目が合うことがあります。どんこは、そんな魚の代表格で、割れ目をのぞきこむとすぐに奥に隠れてしまう恥ずかしがり屋です。実は「どんこ」という名は地方名で、標準和名は「エゾイソアイナメ」です。夜に活発に動き回るので、夜釣りをしたことがある人なら、きっと顔見知りの魚ではないでしょうか。

どんこの生態は長い間よく分かっておらず、お腹に卵を持った成熟した雌を誰も見たことがない不思議な魚でした。ところが、近年、深海に生息しているチゴダラという魚と同じ種であることが

分かりました。きっと、小さく若いものが沿岸で暮らしていて、成長に伴って深みへ生活の場を移してから成熟するのでしょう。

どんこの顔をよく見るとアゴに立派なひげが生えていて、タラの仲間であることが分かります。焼き物や煮物、汁物が好まれるおいしい魚です。この秋、ぜひご賞味してみてください。

農林水産課 ネイチャーセンター準備室 ☎25-9703

復興を願う花火、高々と



8月26日(土)、志津川湾かがり火まつり福興市が開催され、今回で3回目となる三河手筒花火が披露されました。

三河手筒花火は、震災後、愛知県新城市から派遣で本町に来ていただいた職員の皆さんが中心となって打ち上げられています。炎は、大きいもので20メートルほどの高さに吹き上がり、その間、筒を持つ人は頭から火の粉を浴び続けます。今年度、環境対策課へ派遣されている林俊太さんは、「この花火で、少しでも皆さんに元気や勇気を与えられたらと思う。そして、震災を忘れず、南三陸町と新城市が共に発展してほしい。そういった思いで打ち上げた」と熱い気持ちを語ってくれました。

みな
レポ



ミキサー車で消火用水を支援

8月28日(月)、気仙沼地区生コンクリート協同組合と町とが「災害時における消火用水運搬等協力に関する協定」を締結しました。

この協定は、火災発生時にコンクリートミキサー車で消火用水の運搬のほか、災害時に使用する土のうに生コン製造で使用している砂の提供をしていただくものです。

今回の協定締結により、山間部など、防火水槽や消火栓のない地区への消防水利の確保などにつながり、災害に強い南三陸町の実現に向け期待が寄せられます。



役場完成見学会を開催



東日本大震災で被災した役場本庁舎が完成を迎え、9月4日(月)から業務を開始しました。

この、新しくなった役場庁舎を住民の皆さんに見学していただくこと、9月10日(日)に完成見学会を開催しました。

新庁舎に対する皆さんの関心は高く、当日は、子どもから高齢者までの約260人が参加しました。参加者らは、担当者からの説明に熱心に耳を傾けたり、庁舎に多く使用されている南三陸杉を手で触れたりしていました。

参加した一人、高見郷子さんは、「立派な庁舎が建てよかったですね。町長さんや副町長さんの椅子がとても気持ちよかったです」と感想を話してくれました。